79 昭和30年代の名古屋大学 ―ノーベル賞受賞者を生んだ時代―

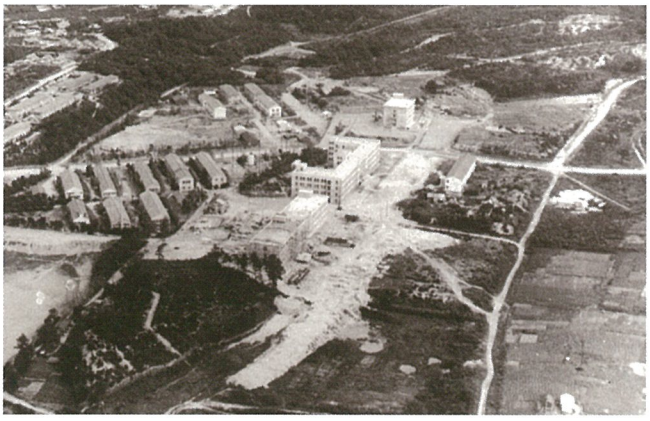
先月、名大卒業生の小林誠博士と益川敏英博士（名大特別招へい教授）、名大で学位を取得し、教員としても在籍した下村脩博士がノーベル賞に輝きました。

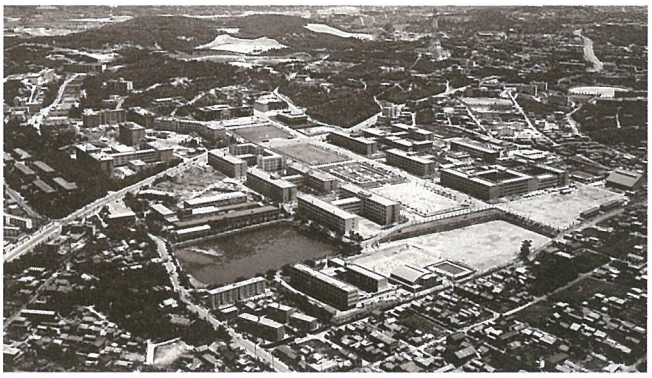
小林博士は、昭和38年に理学部に入学し、47年に博士（後期）課程を修了しました。益川博士は、33年に同学部に入学し、45年まで同学部の助手を務めました。下村博士は、30年から２年半、理学部の研究室で研究し、35年に理学部で博士号を得た後、38年から40年にかけて理学部助教授となりました。３人とも昭和30年代から40年代前半にかけて名大で学び、研究をしていたことが共通しています。

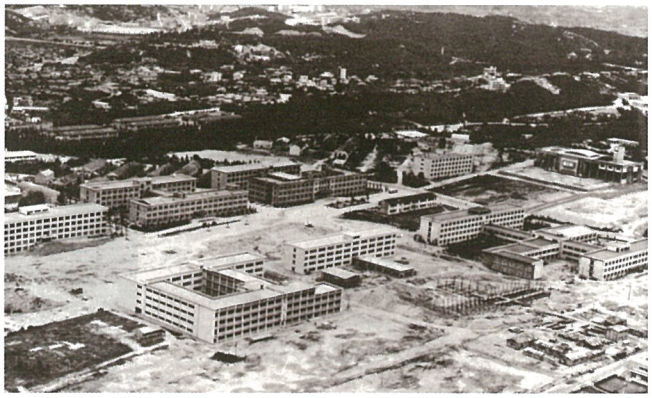
この時代の名大は、施設面でいえば、現在の東山キャンパスの原形ができた時期でした。工学部（高蔵地区、昭和31年）、経済学部・法学部（34年）、文学部・教育学部・本部（38年）教養部（39年）、農学部（41年）というように、学部や本部が東山に集まってきました。すでに東山にあった理学部でもＡ館の増築やＢ～Ｅ館の新築が、工学部では１、２号館の増築や３～６号館の新築がおこなわれました。豊田講堂（35年）、附属図書館（39年、現在の博物館、年代測定総合研究センター）が建設寄付されたのもこの時期ですし、学生会館（36年）、嚶鳴寮（36年、現在の国際嚶鳴館）、職員会館（38年）も建てられました。運動場などの「山の上」地区が整備されたのも36年のことです。

こうして東山キャンパスは、「タコ足大学」から脱却すると同時に、木造中心から鉄筋コンクリート建築の並び立つ景観へと劇的な変化を遂げ、重要な施設も整備されて、日本の基幹総合大学にふさわしい威容を整えたのでした。

またこの時期は、伊勢湾台風（昭和34年）で大きな被害が出たり、２つの安保闘争をはさんだ大学紛争の時代でもありました。３人は、こうしたあわただしくも活気に満ちた雰囲気の中で、ノーベル賞を受賞する研究の基礎をきずいたのです。







1	3
2	

1　昭和29年当時の東山キャンパス。当時の東山には工学部と理学部しかなく、鉄筋建築も工学部１号館南側建物と、理学部Ａ館の一部のみであった。また、現在の文系地区はまだキャンパスに入っていなかった。左端に見えるのは鏡ヶ池。

2　昭和38年当時。文系学部や教養部の移転が進み、教育学部が建設中であった。小林博士、益川博士、下村博士が３人とも名大に在籍していた年である。

3　昭和45年当時。41年に農学部の移転も完了、グリーンベルトも整備されて、現在の東山キャンパスの原形が完成している。

※名大平和憲章にもうたわれている、名大の学風「自由闊達」という言葉が使われはじめた経緯などについて、少しでも何かご存じの方がおられましたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）までご一報ください。